

高齢者のシングルケーススタディにおける 量的分析プロセスモデルの提案 —ランダムイゼーション検定と中央分割法の適用を中心にして—^{注1}

神田 尚*	筑波大学人間系
大川 一郎	筑波大学人間系
田中 真理	筑波大学人間系
滝澤 秀児	株式会社マウントバード
山村 豊	帝京大学教育学部
佐野 大	医療法人社団淳英会
碧井 猛	医療法人社団淳英会

これまでの高齢者のシングルケーススタディにおいて、行動の生起頻度の時系列データを検討する際には、一般的に日々の生起回数や平均値などの視覚的判断法が用いられる。視覚的判断法は、行動の傾向が視覚的に捉えやすく、効果の大きさや関連性が明確に判断できる。しかしその一方、平均値を用いているために、外れ値の影響を受けやすい点が指摘されている。また、統計的検討も系列依存性の制約から、おこなわれていないことが多い。本研究では、統計的検討についてはランダムイゼーション検定を、平均値については中央値に基づいた中央分割法を用いることを提案した。また、これらの有効性を検討するために、田中ほか(2013)のデータの再分析をおこなった。その結果、ランダムイゼーション検定と中央分割法が、高齢者のシングルケーススタディにおいて有効であることを示唆した。

キーワード ⇒ シングルケーススタディ, 視覚的判断法, 中央分割法, 系列依存性,
ランダムイゼーション検定